

『主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物を差し上げ、のどが渇いておられるのを見て飲み物を差し上げたでしょうか。いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたでしょうか。いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたでしょうか』（マタイ25:37-39）。

同じ質問を、左側にいる人たちと右側にいる人たちに、異なった口調でしてみよう。一つのグループには驚いた口調で、他のグループには弁解するような口調で尋ねてみる、私たちはあなた（主）を見なかったと弁解するように。

これらの問い掛けのたびに、イエスを主と呼ぶ人々は、おそらくは、私たちのように、弟子であることを示唆しているようだ。
あるいは、少なくともイエス・キリストを王と認めた一時期であった。

マタイ14章では、イエスは人々が空腹であるのをご覧になり、「わたしは群衆を憐れむ」と言われた。荒野で三日間イエスと共に過ごした人々は、食べるものがなければ、帰宅するまでに目まいを起こすだろうとイエスは心配された。
イエスは、人々が空腹であるのをご覧になり、彼らに食物を与えられた。

ルカの福音書で、イエスが井戸端でサマリア人の女びとに会われた時、女は言った。「師よ、私に生きた水を与えてください。そうすれば、私は決し再び水を求めてやって来ることはないでしょう」。
イエスは、この女には何か喉の渇き以上の何かがあると気付かれた。

イエスは病の人々を見ると癒された。ゲネサ（ヨルダン川東30km）地方で、墓に繋がれている男を見ると、イエスは束縛を解かれ、悪霊を豚の群れのなかに追い込んだ。

福音書にあるこれらすべての御業みわざ、イエスがなされた奇跡は、親愛、慈しみ、哀れみの愛の行いである。決して群衆をイエスご自身に使えさせるためではなかった。これらのことを聞くと、私たちは“うーん、すばらしい！”とってしまう。
私たちは正しい羊であることを望み、永遠の命あずに与かりたい。（マタイ25:46）
だれも山羊になることを望まない。（マタイ25:33）

人々の世話をすることはよい事であると知っている。人々に食事を与えるプログラムはよい事であると知っている。人々は繋がりに気付くと、よい思いをする。

もし入院したことがあったなら、心が高揚した経験があるだろう。家族や友人の誰かが、見舞いのために入り口に現れた時、たとえそれが数分の見舞いであっても。

この福音書の話は、私たちに動機づけを検討する課題が与えられている。

私たちはなぜ人々を助けたいのか？ なぜ私たちは食料寄付に賛同するのか？

天国に席を確保するためか？ よい働きを人々に見られたいのか、税金払戻しのためか？

話に出てくる人々は、空腹であったとき食べ物を与えられ、病気であったとき見舞われ、貧しかったとき服を着せられた。この話はかかわっていない人々と同様に私たちは驚いた。

主よ、いつ、私たちは、あなたが空腹であられるのを見て、食べ物を差し上げ、のどが渇いておられるのを見て、飲み物を差し上げましたか？ いつ、あなたが旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸であられるのを見て、お着せしたでしょうか？ いつ、病気をなしたり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたでしょうか？（マタイ25:37-39）

哀れみをもって行動した人々は、（イエスのように）慈しみをもって行動したのではない。なぜなら、彼らは義（正しいこと）が動機になっていたからだ。

彼らの行いによって正しい人になったのであるが、ただ正しい人になっただけである。

なぜなら神は彼らを祝福されたからだ。そして彼らは正しい人と呼ばれた。

神は誰を祝福されたのか？ すべての人である！

神は御子イエスと共に、すべての人々を祝福された。

この言葉は新鮮で、全くの神であられ、全くの人であられる。

車によく見かけるバンパーステッカーの句を覚えているだろうか？

おそらく一番知られているのは聖書の節で、『神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである』。

（ヨハネ3：16）

『イエスを信じるすべての人々』

毎週、私たちは使徒信経を共に唱える。「十字架につけられ、死んで葬られ、死人のうちから甦えられた神の独り子、主イエスを信じる」と宣誓する。「主は生きている人と死んでいる人を^{さば}審くために来られます。その国は終わることがありません」と唱える。

要するに、イエスを私たちの人生に受け入れることは、神に祝福されていることなのだ。神は人間イエスとして、この世にやって来られた。神の書（聖書）の教えを修得するためにすべてのしがらみから私たちを解放してくださる。

私たちが祝福されていると知るとき、私たちが洗礼によって神に属すると知るとき、私たちは神以外に服従することはないのだ。

コロナウイルスにも、経済、職場の上司、人々の期待、あるいはどんな権力にも服従することはない。この言葉の基幹は私たちである。なぜなら私たちは神に属するからだ。

『イエスを信じるすべての人々』に私たちも属すると受け入れた時、イエスが十字架上で与えて下さった哀れみと許し、この無償の賜物を私たちは受け入れるのだ。

ギフトを受け入れるのは、時には難しい。もし誰かが、あなたに飲み物あるいはコーヒーを買ってくれるなら、その人に再び会いたいと思う自分自身に気が付くだろう。

だからあなたはその好意に報いるために、彼らのために一つを買い戻すのだ。

クリスマスの期間、ギフトの贈呈はほぼ競争のようになってしまう。

私たちが家族の一員に購入するギフトは、その家族が私たちに贈ってくれた物と同じ価値のあるギフトとなるような圧力がかかる。

これは神の教えではない。神は制限なしに与えてくださる。

イエスは制限なしに与えてくださった。イエスは5千人に、4千人に食物を与えられた。

イエスは弟子たちを嵐から救われた。イエスは人々から不浄と呼ばれる人々を癒された。

イエスは社会が死罪を与えた罪人を許された。

イエスは人々を高められた。なぜならそれは神の道であるからだ。

親愛、慈しみ、哀れみ、イエスは私たちに、イエスに従う生きる道を教えられた。

それがこの話にある右側の人々を驚かせたのだ。彼らは名誉の勲章を授与されるために行動したのではない。彼らは単にイエスの教えを歩んでいたのだ。

初代教会が困難であった時代、病気の人、飢えている人、裸の人、貧困の人、牢にいる人に奉仕する人々のために、マタイは書き送ったのだ。

イエスが、すべての人々のためにやって来られたことを人々は受け入れた。

彼らの王として、人々はイエスに従う努力をした。

同様に今、私たちは困難な時代に生きている。神のご要望を、私たちへの日々の祝福として受け入れよう。そして王キリストに奉仕する努力をしよう。

人々に親愛、慈しみ、哀れみを示すことによって。アーメン。

(文責長澤猛)